

こども動物園で

青木 秀子



五月二十二日の午後、上野の子ども動物園での研究会に参加させていただいた。私にとってそれは、動物飼育にとどまらず生きた

保育理論を学ばせていただけた会であった。

この日、動物園の近くに来ると、五月のさわやかな風とともに、昔と変わらない大ぜいの子どもが、おとなに手をひかれ寄って来る動物園のふんい気があった。しばらくそれにひたり、ちょうどチンパンジーが芸の練習をしているのを見ることから、遠藤先生のお話が始まった。

動物飼育は、神経を

使いすぎず、そのポイントをおさえてすれば決してむずかしくはない。そのポイントとは、①栄養を十分に与える。②その動物の動きをよくとらえる。③人も動物も健康管理をよくする……などであった。

しかし、お話は単に動物を飼育することにとどまらず、暗に私たちが子どもを保育する場合と同じ法則のようなものを教えられ、考えさせられた。

チンパンジーの芸(つな渡り、タンバリンをたたくなど)に対し、あれは別に特別なことでなく、彼らが日ごろしている動きに、少し手助けをしただけなんですよ」とおっしゃる。「芸が終わるとあそこ(舞台)で遊ばせてみてそれに遊具を入れたりして芸にもっていくのです」

「動物の抱き方は、一番楽な姿勢、すなわち寝姿で決めるのです」ともいわれた。私たちが保育する時も、子どもの遊ぶ姿、子どもの本来の生活の姿から出発する、そのことと同じである。子どもの

動きを見て、どういうことに興味があり、どういうことができたりするかわかってくる。また、こちらの働きかけ方も、子どもの自然の姿の中に折り込まれていくべきことにも及んでいくと考える。

そして動物の日ごらの動きをよくとらえるには(飼育ポイント②)「小さい箱の中に入れてはわからない。また一匹だけだと動きは制約される。二匹にする と繁殖が見られ、さらに群にするとトラブルもおこり、いろいろな動きが見られる」とおっしゃった。これもそっくりそのまま、子どもの場合にもあてはまる。広い場所に子どもをおいたとき初めて、小さい部屋にとじこめ、さらに小さな何かをさせている時とは異なるいろいろな可能性が見えてくる。まさに保育の根源的条件の一つである「空間」の必要性を指摘されているようである。また「一人より大せい……」は幼稚園教育の存在理由をいっている。子どもの数が増すこと

で、空間の位置関係が変わり、そこでのエネルギーの方向が変わり、ぶつかりあって一人一人のいろいろな面が出てくる。つまり、子どもが子どもによって保育される、保育の大きな部分のことである。

子ども動物園を運営する立場から、園内を、(1)見る、(2)子どもが参加する、(3)休む、ということを考えてつくっておられるという。

そして「見る」という子どもの行動について研究をおもちで、「その動物に視線すら投げかけないでいる子どもを見、見る意欲がないならその場を離れさせようとする」と離れない、ということがあったのです。子どもは見えていないふうでも見ているかもしれない。「見ない」も一つの見方」といわれた。私など毎日子どもを追っていて、よくぶつかる場面でもあり、そんな時、誤まった判断をしてきたのでは……とドキリとさせられた。子ども

もはからだでふんい気までも見る力をもっていることを、ここでも教えられた。遠藤先生のお話を伺いながら終始感じたのは、先生がラマなど動物を育てられた経験が話される時のあの明るいお顔、そして何でもない普通の言葉で話されるが、そこにある喜びと重み、である。

「生きているものを育てる人」のもついきいきしきを見た気がした。動物の立場に立ち、また動物(自然)を求めてやってくる子どもの立場に立ち、命あるものがいきいきと生きることをたいせつに考えてくださる先生に、頭のさがる思いである。そしてもっともっと、こんな場とこんな方々のふえることを願っている。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)